

コメント

安室 知

1. はじめに

セッションⅢのテーマとなる民具と民俗技術とは、まさにハード・ウェアとソフト・ウェアの関係にあるといえる。多くの場合、身近卑近の民具は単機能には特化していない。ひとつのモノでも多様な使い方が可能となる。また、親切なマニュアルも存在しない。それだけにその使い方を左右するソフト・ウェアとして民俗技術は重要である。

おそらく民俗技術への論及なくしては、民具研究は従来その中心であった形態・機能論および系統論を超えて人の生を明らかにする方向へと向かっていかないであろう。そうした点からも、今回のセッションⅢ「民具と民俗技術」のテーマ設定は意義深く、重要な意味を持っていると考える。

シンポジウムにおいて民具については多くが語られるため、ここではまずコメンテーターなりの民俗技術の理解を示すことから始め、その後パネリスト3氏の研究発表に対する若干のコメントを申し上げたい。

2. 民俗技術とは

民俗技術は、工業技術とは対極をなすもので、民俗知（生活知）に裏打ちされた技能をいう。その多くは、個人が身体的・経験的・伝承的に獲得していったものであるため、汎用化よりも個別化・特殊化する傾向が強い。そして、それは文字化されることなく暗黙知として身体化され、また記憶として伝承される。しかしいったん文字化され汎用技術となったものも、個人の知恵や工夫が凝らされることで、そこにまた民俗技術が形成されることも多く、民俗技術と汎用（工業）技術とを峻別することは研究上あまり生産的ではない。

民俗技術には、自然との関わりで注目すべき特徴がある。それは、民俗技術が自然を改変するだけでなく、改変した中に新たな自然（二次的自然）を生み出すことである。近代以前の在来技術によって作られ維持されてきた水田はそのよい例であろう。

水田は高度に管理された人為の場であるにもかかわらず、それは多くの日本人に自然を想起させる機能を有している。日本人の自然観は人を寄せつけぬ大自然にあるのではなく、水田風景のような二次的自然にあるといわれるが、それは言い換えると民俗技術のあり方が自然との共生関係を維持する機能を有し、その共生関係に日本人は自然を感じてきたことを示している。

民俗技術を媒介とした自然との共生関係について、水田を例にして、もう少し具体的に見てみよう。先に示したように、水田は明らかに人が自然を開発し管理してきた空間であるが、そこは同時に水田環境に適応して繁殖する魚類や鳥類にとっては重要な生息地・越冬地となっていた。そうした魚や鳥を稲作作業の工程に応じて捕獲するさまざまな方法が水田稲作地帯には広く見られた。そうした水田を舞台とした〈人-稲-動物〉の関係は優れて共生的であるといえよう。この場合、稲作が毎年繰り返されるかぎり、そうした共生関係は維持されることに最大の特徴がある。

ただし、一概に民俗技術がすべて共生的であるとするのは誤りである。民俗技術は確かに自然と人間活動との調和的關係の上に見られることが多いが、それだからといって民俗技術の志向する方向が必ずしもそうした関係の維持だけに向いていたわけではない。民俗技術の多くが、自然と人間活動との拮抗した場面にお

いて、自然に順応する形で営まれることが多いためそう見えるに過ぎない。結果として共生的にならざるをえなかったわけで、その志向する方向性のひとつは確実に工業技術につながっている。民俗技術の中に見られる共生的な要素は、自然と人の技術力が拮抗した段階でのいわば成り行きの産物であるといえる。それを錯覚すれば、いわゆる「民俗技術＝環境保全型技術」「民俗世界＝理想郷」のドグマに陥ることになる。

3. 若干のコメント

周星先生は、中国における民具研究の現状と課題を、日本の民具学史と対比しつつ適切に整理されている。そして、そのなかで「民具学」と「物質文化研究」とを意図的に使い分けている点は注目しなくてはならない。とくにかつて日本で提起された比較民具学の構想を取り上げて、民具の国際比較の必要性を挙げるとともに、物質文化研究という研究法の重要性を指摘する。コメンテーターなりにそれを解釈すれば、本来、比較民具学とは物質文化研究として昇華されるべきものであろう。

民具というとき、それは必ず「わが国における身近卑近の…」というように国家という境界（限界）を暗黙のうちに設けてしまっている。犁を民族移動や文化伝播の側面から考察することの必要性を指摘する尹先生や排泄民俗を中国と韓国の共通点と差異点から考察する必要性を指摘する高先生の発表に明確に示されるように、モノには国境を越えた研究視点が求められよう。「中国の民具」「韓国の民具」「日本の民具」といった捉え方ではなく、周先生が示唆するように、東アジアの「物質文化研究」とすべきである。この点は今後、日本の民具学のなかでも、もっと議論されなくてはならない重要な指摘であろう。

尹紹亭先生による犁の研究は、ヴェルト学説批判に基づく、実証性の高いものとして評価されよう。とくに、コメンテーターにとって印象深い点は、羊・豚による蹄耕や火耕はこれまで犁以前の素朴な段階と片づけられがちであったが、その点について「犁耕出現前の原始的耕作形態なのか」と疑問を呈していることである。

犁耕の発明は一概に生計維持システムの進歩を意味するものではない。たしかに犁耕は蹄耕に比べると技術的には進歩したものではあろうが、生計維持の上で犁耕の必要がなければ当然導入されなかったといっただよい。近代日本における耕耘機や田植機の例を見ても、いち早くその導入を決めたのは兼業農家でありサラリーマン農家であったわけで、生計維持を農業に特化させた専業農家ではない。結局のところ、先進的な技術の導入がより進んだ農業のあり方を示しているわけではない。

高光敏先生による排泄民俗の研究は、中国・韓国・日本のどの国においても、従来あまり取り上げられることのなかった分野であろう。排泄は人を含む動物にとっては睡眠や性とともにもっとも基本的な生理現象であるにもかかわらず、それが研究テーマとして等閑視されてきた背景には、本来は研究対象となるべき不浄観が研究者側の意識にも影響を与えてしまっていたからかもしれない。

そうした点に着目した先見性は重要である。なかでも、排泄民俗の研究は、生業や食文化の研究とともになされることで、トータルに人の生を考えると、いっそう重要な意味を持つてくることを示唆している点は重要であろう。